

# 草庵仏教

第168号  
(発行日)  
2004年6月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)  
63-4488  
(発行人) 土井紀明  
メール: kimyou4@yahoo.co.jp  
http://www.eonet.ne.jp/~souan

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月22日午後2時  
.....
- 〈念仏座談会〉  
第1土曜日午後3時  
第3土曜日午後3時  
\* 8月の〈同朋の会〉及び  
第3土曜日の念仏会は休み。

## 孤独と人間不信

L 「最近、ある先生の講義を聴きました。現代は孤独と人間不信の問題が顕著な時代だといわれました。この問題について真宗ではどう応えられているのでしょうか」

D 「孤独と人間不信ということですが、なぜ人間が孤独になるのかということ。ひと昔前までは、住んでる地域での地縁とか血縁が濃く、私のしばらく居ました村では、村の中に親戚が多く、親戚付き合いが頻繁に行われていました。ですから、自分一人だけで生きることにはきないわけで、そういう意味では付き合い上のしがらみやらぎづかいに苦労もある反面、孤独になることは少ないように思いました」

L 「病気になれば誰かが面倒をみて来てくれたり、親戚のものがしばしば尋ねてきてくれたり、葬式や法事ごとになると、お互いが助け合ったりするのでね」  
D 「ええそうです。お互いが小さい頃から遊び友だちであり、学校友だちであり、寺の行事や神社のお祭りなども一緒に世話をして参加するのです。そういう狭い地域に親戚などがよりあって生活していて、人と人の結

びつきが強い場所では、ひとりぼっちで誰も知った人とあわないとか、人を訪ねあうこともないとかいうことはありませんから、孤独になることは少ないように思います」

L 「逆に言えば、地縁や血縁が希薄な場所に住んでいる人は孤独になりやすいということですね」  
D 「ええそうです」  
L 「都会に移ってきて見知らぬ人たちの間で住むような場合などです」

D 「ええ。都会でマンション暮らしをする場合など、隣り近所の人といっても知らない人ばかりで、めったに顔を合わせませんし、合わせても簡単なあいさつ程度です。親戚も遠くになかなか訪ねて来ないという状況では孤独になりやすいですね」

L 「しかし、地縁や血縁の希薄な都会に住んでいるからといって、必ずしも孤独になるとはかぎらないですよ」  
D 「もちろんそうです。知らないもの同士の間に一人で住んでいる都会の暮らしの中であつても、必ずしも孤独になるとはかぎりません。地縁や血縁の希薄さは孤独になりやすい一つの縁

であつて、それらが原因で必ず孤独になるというのではもちろんありません」

L 「ただ、地縁や血縁が薄い都会では孤独になりやすいとしても、現代はいたるところで孤独の問題があるということも聞いています。地縁や血縁が濃厚な所に住んでいても、原因によっては孤独になり得るということですね」

D 「ええそうです」  
L 「では、どこでも孤独になりやすい主な原因は何でしょうか」  
D 「それが初めにいわれていた人間不信ということではないでしょうか」

L 「人が信じられなくなるのですね。人が信じられないというのはどういう状態なのでしょう」  
D 「それには、ある特定な人に対して不信感をもつ場合と、人そのものに対して不信感をもつ場合とがあります。たとえば特定のAさんを信じることができなくなったという場合、Aさんは私のことを本当に大事に思い、私のことを心から心配し、私の幸せを心から願ってくれてる人と思っていたけれど、実際は私のことなど真剣に考えてくれていなかったとか、私に対して冷淡になったとか、そういうことだからAさんに対して不信感がつつるというような場合です」

L 「夫は私を心から愛してくれて

ていると思っていたけれど、外に好きな女性がいたことがわかり、それ以後夫が信じられなくなったとか聞きますね」

D 「そういうような特定の人に対する不信感というのはすぐに孤独につながりません。けれども、人間そのものに対して信じるのができなくなった場合、これは孤独になってしまいます。むかし父親が代議士だった有名なある女性(故人)についてのドキュメントをテレビで見たことがあります。その中でその方の娘時代、有力代議士の父が力を持っていた時、毎日のように人が父の所を訪ねてきたが、ひとたび父が病気になって政治的な力を失ったら、今まで父の所に来ていた人たちが水が引くようにだれも来なくなつた。それから私は人を信じられなくなつて、信じられるのは自分とお金だけと思うようになった、という女性の回想がありました」

L 「なるほど。それと同じだと思いますが、人に裏切られたり、見捨てられたり、だまされたりするのが重なるのだんだん人間そのものが信じられなくなるといふことがありますね」

D 「ことに親を信じられなくなっている子がいますが、この場合は当然、人間そのものへの不信になりやすいですね」  
L 「なぜですか」  
D 「人間関係のはじめに親子関

係

係があるとします。親こそ、自分に嘘をつかず、自分の幸せを願ひ、自分の不幸をともに悲しんでくれる人であつて、この世で一番信頼できる人であるはずです。ところがその親に対して不信感をもつようになると、もう自分のことなど心の底から心配してくれる人などどこにもいない。私は所詮ひとりぼっちだ、この世でたよりになるのは自分だけ、ということになりやすいのではないでしょうか。ですから親が信じられなくなると、人そのものが信じられなくなる可能性がより高くなります。もちろん、幸運にも本当に信頼できる異性とか友人にであつて、人間不信に陥らなくてすむことは十分あり得ることですが」

\*

L「では親子・夫婦・友人関係などの間で、お互いに信頼し合っている人たちも当然多いのですが、そういう人たちはどうなんでしょうか、もはや人間不信に陥ることはないのでしょうか」  
D「そういう人間関係が良好でお互いが信じ合えていることはすばらしいことです。ただこうした人間関係は何時までも変わらずに続くという、そういう保障はありません。何かの縁で愛し合っている関係がこじれてしまい、逆に憎みあい怨みあう関係になることがあります。また、現在良い関係に結ばれていて信頼しあつていても、もしかした

ら将来お互いの関係が悪くなつてしまふのではないかという、そういう不安もあると思います」  
L「ですから愛し合っている中で、相手の顔色をいつもうかがつてしまふということがありましようね」  
D「たとえ自分が将来、肢体が不自由になつたり、痴呆になつてしまつたりすると、本当に自分を見捨てずにそばにいてくれるのだろうかとかいうような不安をもつことはだれしもあると思います」

\*

L「孤独と人間不信の関係をもう少し話してください」  
D「人間が信じられなくなつて、信じられるのは自分とお金だけとかいうようになると、他者からの愛情を感じることも少なくなり、また人を愛することも浅くなりますから、当然孤独になつていきます。人間に不信感をもちますと人と人が心から交わりあうことがなくなつてしましますから、さびしいものです。信じられない相手に対してあなたかい気持ちで接することは当然とぼしくなりますし、人からの愛を信じられなくなりますから、私は人から愛されていないという気持ちになり孤独になります」

L「そういうことは都会だけではなくて、たとえ地縁や血縁が濃厚な地域でも当然あり得ることです」

D「そうなんです。知つた人が多くいても愛情関係が希薄になると孤独になります。要するに人間不信と孤独の問題の元に愛の問題があります」

L「けれども先ほど少しおつしやいました、人と人が愛し合つていても人間同士の愛の関係はなお不安定である」と

D「ええ、状況が変われば、愛し愛されるうるわしい関係が崩壊するということもまれではありませぬし、将来、関係が破綻するかもしれないという不安もあるのです」

\*

L「では一体、壊れない愛の関係はないのでしょうか」  
D「人間同士の関係の中ではありえないことです。それは仏(神)と人の間においてのみありえることです。阿弥陀仏と人の関係こそ不変な愛の関係です。私が阿弥陀仏を求めると先立つて、阿弥陀仏は私をどこどこまでも見捨てない、(お前をおさめ取つてやまない)と喚びかけてくださっています。しかもこの阿弥陀仏の愛(純粹な慈悲)に気がつくともう二度と愛の関係が崩壊することはありません。どんな状況にあつても阿弥陀仏は私と共にあり、私に大悲を注いでくださっています。ですからもはや孤独感はなくなるのです。たとえこの世で誰からも相手にされず、見放されてひとりぼっちになつたとしても」

\*

L「では阿弥陀仏にであつると、人間不信についてはどうなるのでしょうか。」  
D「どんな人にも善意をもつて接するようになっていくのではないのでしょうか。ただこの世には人をだまして金品を得ようとしたり、平気でウソをつく人がいるのも事実です。ですからどんな人の言うことも頭から信じずかかるといふわけではありません。だまされると分かつてだまされるのは愚かだと思ひます。けれどもこの世は生きるに十分値しえる世であり、他の人とやわらぎあつて平和に暮らすことを願ひ、人助けもできるだけしたいという願ひを持ち続ける。なぜなら、阿弥陀仏は私たちとともにおられ、仏の願ひが働いてくださるからです。たとえだまされてつらい目にあつても、人間不信に陥らないのです」

\*

L「では、人間関係が今は好ましいけれども、将来、もしかしたら私は見捨てられはしないかという不安についてはどうなのでしょう」  
D「阿弥陀仏は私を決して見捨てたまわぬ。たとえ現在愛し合ひ、信頼関係のある人が私を見放したとしても、私は阿弥陀仏の大悲の中にいるから、そう

なつても私は絶望はしない。また見放した相手を怨んだり憎んだりする渦の中に私は落ち込まない、(こういうことが十分可能であると思ひます)」  
L「人間同士の愛の関係は不安定にもかかわらず、安定して生きることはできるのは仏と人間の親しい関係が成立することによつてなのですね」  
D「そうなんです。そして大事なことは、阿弥陀仏との交わりの中にいるなら、現在、愛し合つている相手、信頼し合つている相手に対して、過度にその相手に自分への愛情や優しさを求めない」  
L「相手に愛情や優しさを過度に求めないというのは？」  
D「相手がいつも自分のことを大事に思ひ、思いやりをそいでくれ、優しく接してくれることを期待しすぎるのは、我執・我愛の心ではないでしょうか。それは相手を愛しているようでも、自己愛の変形ではないでしょうか。たとえ私が相手から冷たく接しられても、私は徳のな

い人間だから当然あることです。それは仕方がないことです。しかし、もしそういう目にあつても、相手を憎んだり怨んだりしつづけることはできない。なぜなら阿弥陀仏は、私の反逆すら少しもさわりなく受け入れ大悲したもうお方ですから」

# 歎異抄 第十五章第四講

この身をもつてさとりをひらくと  
そうろうなるひとは、釈尊のごとく、  
種種の応化の身をも現じ、三十二相  
・八十随形好をも具足して、説法利益  
そうろうにや。これをこそ、今生に  
さとりをひらく本とはもうしそら  
え。『和讃』にいわく、「金剛堅固の信  
心の さだまるときをまちえてぞ  
弥陀の心光摂護して ながく生死を  
へだてける」とはそうらえば、信心  
のさだまるときに、ひとたび摂取し  
てすてたまわざれば、六道に輪回す  
べからず。しかればながく生死をば  
へだてそうろうぞかし。かくのごと  
くしるを、さとりとはいいまぎらか  
すべきや。あわれにそうろうをや。

(歎異抄第十五章より)

(語句の説明)

三十二相―仏の身に具わっている三十  
二種のすぐれたすがた。頂上肉髻相・身  
毛右旋相・眉間白毫相などをいう。  
八十随形好―仏・菩薩の身に具わる  
勝れた容貌形相の中で、顕著な三十二相  
に対して、微細な八十種の形相をいう。  
歩き方が象のようにゆったりしている、  
耳たぶが輪状に長くたれ下がっている、  
などがある。

現代語訳(この世でさとりを開くといっ  
ている人は、釈尊のように、人々を救う  
ためにさまざまの姿となって現れ、教え  
を説いて人々を救うのでしようか。この  
ようなことができてこそ、この世でさと

りを開いたといえるのです。『高僧和讃』  
に「金剛堅固の信心の さだまるときを  
まちえてぞ 弥陀の心光摂護して なが  
く生死をへだてける」―決して壊れる  
ことのない信心が定まるそのとき、阿弥  
陀仏の慈悲の光明におさめ取られ、つね  
に護られて、もはや迷いの世界に戻るこ  
とがない―とあるように、信心が定ま  
るそのときに、阿弥陀仏はわたしどもを  
おさめ取って決してお捨てにならないの  
ですから、迷いの世界に生れ変わり死に変  
るはずがありません。だから、もはや迷  
いの世界に戻ることがないのです。しか  
しこのように知らせていただくことを、  
さとりだなどごまかしていつてよいも  
のでしようか。大変悲しいことです)

\*

〈信心をいただいたら、すでにこの世  
でさとりを開いたといえるのである〉と、  
そういうことをいう人たちに對してそれ  
は親鸞聖人の仰せに異なる説であると、  
唯円房は嘆いておられるのです。

先日も、あるお方が、「聖人はこの世  
でさとるといふことをいくつもいってお  
られる」と話されました。そこで「さと  
る」という言葉を聖人ご自身のお言葉か  
ら拾ってみますと、たとえば和讃に「弘  
願真宗にあいぬれば 凡夫念じてさとる  
なり」とか「回向の信 樂うるひとは  
大般涅槃をさとるなり」とか「眞実信心  
うるゆえに すなわち定聚にいりぬれ  
ば 補処の弥勒におなじくて 無上覺を  
ばさとるなり」とか「万行諸善の小路  
より 本願一実の大道に 帰入しぬれば  
涅槃の さとりはすなわちひらくなり」  
などがあります。この場合の「さとる」  
は、死後に淨土に生まれて「さとる」と  
いう思し召しだ、というのが伝統的な了

解であり、私も同意であります。そのさ  
とりも(大涅槃)というこの上なきさと  
りであります。たとえば「凡夫念じてさ  
とるなり」も、「凡夫念じる」とは凡夫  
が本願を憶念すること、憶念するとは「憶  
念の信」で、本願を信じてことです。そ  
こで「凡夫念じて」すなわち本願を信じ  
るならば、「さとるなり」と続きますが、  
信じたらずに「さとる」という意味に  
もとれますが、この世を終えて大涅槃を  
「さとるなり」と理解するのが穩当であ  
りましょう。

ところが本願を信ずればさとるのなか  
ら仏になつたも同じであるという風にい  
う人たちが当時いたようで、そういう説  
に對して唯円房は、もしこの世で本願を  
信じたらずに仏になるというのなら、現身で  
さとりを開かれた釈尊のように「種種の  
応化の身をも現じ、三十二相・八十  
随形好をも具足して、説法利益」がで  
きるはずであるが、そういう人たちにそ  
んな仏の徳は一向にみられない。であ  
れば念仏行者がこの世で仏になるなどとい  
うことは間違いであるといわれるのであ  
ります。

\*

それでは「さとる」という言葉はこの  
世でのことにはいつさい聖人は使われな  
いのかというと、大涅槃という意味では  
ない意味での「さとる」という言葉を使  
われることがあります。たとえば「別解  
は、念仏をしながら、他力をたのまぬな  
り。(乃至)、解は、さとるといふ、と  
くといふことばなり。念仏をしながら自  
力にさとるなり」(一念多念文意)  
という聖人の言葉があります。ここで「解  
は、さとるといふ」といわれています。  
すなわち理解するとか了解するとか、受

け取るという時に「さとる」という言葉  
を使われています。また「洞曉衆經と  
いうは、あきらかによるずの經典をさと  
りたまうとなり」(尊号眞像銘文)とい  
うお言葉もあります。通曉という熟語  
があるように「曉」をさとるといわれ、  
あきらかに知るといふ意味でも使われて  
います。そうすると、「さとる」という  
のは「理解する」「受け取る」「あきら  
かに知る」などの意味でも「さとる」と  
いう言葉を聖人は使われています。

また聖人の「一念多念文意」には「如  
來の本願を信じて一念するに、かならず、  
もとめざるに無上の功德をえしめ、し  
らざるに広大の利益をうるなり。自然に、  
さまざまのさとりを、すなわちひらく法  
則なり」とあります。この場合の「さ  
まざまなさとりをひらく」といわれるの  
は仏教でいう「仏の正覺」なり「涅槃の  
さとる」といふ意味と異なると思います。  
この場合のさとるといふのは(無上覺)  
という意味のさとりではなくて、信心の  
智慧が人生生活の中に働いてくださり  
「さまざまのさとりを、すなわちひら  
かせてくださる、すなわちこの世の生活  
の中でさまざまに「尊いことを気づかせ  
てくださる」といわれるのではないでし  
ようか。

\*

ただ、多くの場合、「さとる」という  
のは「無上覺をばさとるなり」で、この  
世においてではなくて、この世を終えて  
淨土にてさとりを開らき仏になる意味で  
宗祖は用いておられます。ですから、信  
心をいただいたらもうこの世で仏のさと  
りを開いたのだというのには、聖人の仰せ  
に異なる説であると、唯円房は批判され  
ているわけです。

(了)